

憲政史から考える、わが国の未来

高橋大輔（尾崎行雄記念財団研究員）

プロローグ—そもそも「憲政史」とは？その定義と前史

- ・明治憲法（大日本帝国憲法）は 1890(明治23)年2月11日公布、11月29日施行
- ・明治改元（1868年）～新政府成立（1869年）から第1回帝国議会までの時差
- ・議会開設以前の総理は3人（伊藤1885～、黒田1888～、三条1889）

1. 憲政前史—誰が「国家の礎」をつくったか

	西暦	元号	当時
・2人の傑物と3体の立像			
・吉田松陰（第一走者の生みの親）	<u>1830-1859</u>	文政12-安政6	
・福沢諭吉（近代国家生みの親）	<u>1835-1901</u>	天保6-明治34	55
・伊藤博文（初代内閣総理大臣）	<u>1841-1909</u>	天保12-明治42	49
・板垣退助（自由民権運動の旗手）	<u>1837-1919</u>	天保8-大正8	53
・大隈重信（尾崎にとって政治の師）	<u>1838-1922</u>	天保9-大正11	52
・尾崎行雄	1858-1954	安政5-昭和29	32

2. 130年を総覧する—日本は何と戦ってきたか—

- ・国難の分類、大きくは3種類（戦争、自然災害、そして経済危機）
- ・時系列でみる、その他の脅威 など

3. 政治家と言葉、あるいは演説

1) 企画展示から学べること—展示は何を訴える

2) 憲政史に残る2大演説

尾崎行雄「国家の大方針を問ふ」 (1937年) 昭和12、79歳

斎藤隆夫「支那事変処理に関する質問演説」 (1940年) 昭和15、尾崎82、

3) その他、憲政史上で特筆すべき演説あれこれ 斎藤(1870-1949、尾崎の12下)

田中「亡国演説」、池田「追悼演説」、尾辻「哀悼演説」、枝野「内閣不信任演説」

エピローグ

- 1) そもそも「良い政治」とは、良い政治家とは、そして良い有権者とは → 『議会学』
- 2) 尾崎財団の、そして峯堂塾の存在意義とは

【1. 憲政前史－誰が礎をつくったか－】

- ・吉田松陰：松下村塾で議会の第一世代を育てた。弟子には伊藤博文、山県有朋、品川弥二郎など。松陰と尾崎との接点はないが、22年前、石田さんと相馬雪香さんが描いた**峯堂塾のコンセプト**は松下村塾をイメージしている。年齢、肩書き、背景、関係ない。頭でっかちにならない、学びを世に還元するなど。
- ・福沢諭吉：吉田松陰とほぼ同時代人。犬養毅（つよき）と尾崎行雄が代表格。第1回の総選挙で「私に入れるな」と触書を出した。「学問のすすめ」1872(明治5)～1876(明治9)、1880(明治13)。尾崎の年齢と重ねると、**当時は14～18歳**、特に後半は福沢が持論を世に問い続けている場面をリアルタイムで見えてきたことになる。1890年、尾崎初当選。(32歳、福沢は23歳上なので55歳)
当選に浮かれる尾崎に送った一言
道楽発端称有志（道楽の発端は有志と称し）
馬鹿骨頂為議員（馬鹿の骨頂 議員と為る）
- ・伊藤博文：戦前の2大政党、立憲政友会を率いた。帝国憲法（明治憲法）起草者の一人。他には井上毅（犬養と同じ名だが、こちらは「こわし」、伊東巳代治、金子堅太郎。政友会設立は、何度となく政府の邪魔に逢う。政党政治を最も嫌ったのは、松下村塾の同門・山形有朋。
- ・板垣退助：明治維新後の日本を牽引した「薩長土肥」一角、後藤象二郎（伊藤内閣の農商務大臣や、黒田内閣の通信大臣を歴任）と並ぶ、土佐の代表格。民選議院設立建白書（1874、明治7年）を政府に対して要望したことが、後の自由民権運動の先駆けになった。**尾崎16歳のとき**。
- ・大隈重信：福沢諭吉と矢野文雄（竜溪）推薦で、尾崎は23歳で統計院に奉職（権少書記官）、1881(明治14年)、当時のボスが**大隈**だったが、同年の政変を期に下野。伊藤はプロイセン（ドイツ）派、大隈はイギリス派だった。二人ともルーツはイギリスだが、伊藤は長州5傑（井上聞多（馨）、遠藤謹助、山尾庸三、野村弥吉（井上勝）、そして伊藤俊輔（博文））として実際の見聞があった。大隈は渡航経験が無かった。それでも圧倒的な海外情勢に対する知見と洞察力、そして何よりも胆力を持っていた。円（指で輪っかを作る）の考案、尾崎とならぶ演説レコードなど、エピソードは数知れず。

人物関係を追いかける上で、尾崎行雄はうってつけの指標になる。ひとつは**年齢そのものの長さ**、もうひとつは政治家としての**活動期間の長さ**。尾崎を知ることは、憲政史のおよそ半分を知ることにもつながる。戦後までの間、尾崎は「**生きる憲政史**」だった。

【2. 130年を総覧するー日本は何と戦ってきたかー】

1890.11.29 大日本帝国憲法が公布される。今年に議会開設 130年の節目

1) 戦争

日清 1894-1895、日露 1904-1905、日中 1937-1945、太平洋（大東亜） 1941-1945

2) 自然災害

関東大震災 1923.9.1、伊勢湾台風 1959.9.26、阪神・淡路大震災 1995.1.17

東日本大震災 2011.3.11。災害は他にもあるが、数千人から数万人規模の犠牲を出した。

3) 経済危機

世界恐慌 1929、バブル崩壊後の破綻ドミノ 1997、リーマンショック 2008

コロナ危機 2020。後世ではどのように分類されるか分からないが、恐らくは経済危機に分類されるのでは。経済の講義は池田信夫先生の講義でじっくり考える機会を設ける予定、ご期待いただきたい。

これらを時系列で並べると・・・？

明治

日清 1894-1895

第2次伊藤内閣

日露 1904-1905

第1次桂内閣

大正

関東大震災 1923.9.1

内閣不在（加藤(友)内閣ー第2次山本内閣の隙間）

世界恐慌 1929

浜口内閣

昭和

日中 1937-1945

第33代、林銑十郎内閣～第42代、鈴木貫太郎内閣

太平洋（大東亜） 1941-1945

ラストは鈴木貫太郎。順に林、近衛文麿、平沼騏一郎、阿部信行、米内光政、近衛(38,39)、東条英機、小磯國昭、鈴木。いずれも大命降下。

——ここから戦後——

伊勢湾台風 1959.9.26

第2次池田内閣

平成

阪神・淡路大震災 1995.1.17

村山内閣

破綻ドミノ 1997

橋本内閣

リーマンショック 2008

麻生内閣

東日本大震災 2011.3.11

菅内閣

令和

コロナ危機 2020

第4次安倍内閣

戦前の組閣システムで現在と違うのは陸軍および海軍大臣の存在。それぞれの協力なくして組閣は成立しなかった。近衛内閣は国民人気に支えられていた、その功罪は。

【3. 政治家と演説、あるいは言葉】

憲政記念館ではこの6月1日から、議会史上の雄弁家を採り上げた企画展示が始まった。その中で、今回は尾崎行雄と齋藤隆夫に注目する。

尾崎といえば、桂弾劾演説が有名。第1回の講義で、理事の石田さんも取り上げた。

「玉座をもって胸壁となし、詔勅を弾丸に代えて政敵を攻撃するものではないか」。

桂内閣を痛烈に批判した。私はそれ以上に、2. 26事件（1936年（昭和11年））の翌年に行った演説が印象深い。1937年（昭和12年）2月17日に行われた質問演説を、ここでは仮に「国家の大方針を問ふ」質問演説と呼ぶ。

尾崎は演説を行う前、**辞世**を詠んでいる。命を落とすかもしれないという覚悟があった。

- ・命にもかえて今日なす言説を わが大君（天皇陛下）は いかに見たまう
- ・正成が敵に臨める心もて 我は立つなり演壇の上

正成は鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての武将、楠（くすのき）正成。後醍醐天皇の南朝に与し、足利尊氏が立てた光明天皇の北朝と対立した。鎌倉時代のあとは室町時代とも言われている通り、足利、つまり北朝の天下になった。楠正成といえば、「**七生報国**」、七たび生まれ変わっても国に報いるという気概を示した忠臣として語り継がれている。実はこういったところにも福沢の教え（「学問のすすめ」にも出てくる**楠公権助論**、立派な死に方と、無様な死に方のたとえ）が垣間見える。レトリックだけでない、過激な文句はない、むしろ淡々としている。辞世を詠むほどの覚悟とは対照的。

無理もないのは、尾崎は**5年前の1932年（昭和7年）5月15日**、盟友・犬養を**5. 15事件**で喪っている。覚悟が違う。

こうした尾崎を奮い立たせたものは何か。実は尾崎の背中を見て育ってきた、地元選出の「腹切り問答」浜田国松であり、議会史上最高の演説を投げかけた齋藤隆夫の存在があった。尾崎の決死の演説の前、齋藤も「**肅軍演説**」で2. 26事件が巻き起こした混乱の收拾をどうつけるのかと投げかけている。この時にも「**国是の大方針**」という言葉がキーワードになっていた。時系列を、改めて整理してみる。

5. 15事件	: 1932年（昭和7年）5月15日
2. 26事件	: 1936年（昭和11年）2月26日
齋藤の「肅軍演説」	: 1936年（昭和11年）5月7日
浜田の「腹切り問答」	: 1937年（昭和12年）1月21日
尾崎の「国家の大方針」	: 1937年（昭和12年）2月17日

尾崎演説を軸に見ると、各々の年齢は以下の通り。尾崎は人生の本舞台を地で行っていた。

・尾崎行雄	1858-1954	安政5-昭和29	79
・浜田国松	1868-1939	慶應4-昭和14	69
・斎藤隆夫	1870-1949	明治3-昭和24	67

もうひとつ、今回取り上げたい演説は斎藤隆夫の「支那事変処理に関する質問演説」、通称「反軍演説」。通称にとらわれず、その文脈や抑揚、比喩や引用などに注目していただきたい。

- ・ 輪読した部分は、議会の速記録からは削除されている。斎藤の言葉は憲政史から抹殺されかけた。それを免れたのは、事務方が記録のレコード円盤を回していた、それに政府が気づかず、円盤は破棄を免れてのちに公のところとなった。
- ・ この1件で、斎藤は除名を余儀なくされる。それほど危険な、不穏な発言だったのか。国賊、あるいは逆賊だったか。
- ・ 興味深いのは、先の「肅軍演説」から「反軍演説」にいたるまで、新聞の論調が次第に傾斜していく。角度がついていく。

昭和11年「肅軍演説」のとき、新聞はこう取り上げた。

→「**敵たり議会の威信／肺腑突く斎藤氏の舌鋒**、陸相また率直に答弁。果敢なる挺身、言論自由ここに返り咲く」(読売)、「軍当局の決断を望む、斎藤隆夫氏の熱弁」(朝日)。それが浜田の腹切り問答のときは「政党の猛襲に政府決全反撃」(朝日)と、主客がすり替わってしまう。

「反軍演説」にいたっては「斎藤氏、質問中に失言」(朝日)。今につながるものがある。

斎藤は気を吐いたが、それでも戦争への歩みを回避することは出来なかった。けれども、言論は果たして無力だったのか。私は違うと思う。この憲政記念館の2階には、斎藤に最大の屈辱を与えた、衆議院からの**除名通知**が展示されている。そしてその戦いを見ていた国民からの、**感謝や激励の手紙の数々**が残されている。ぜひとも確かめて頂きたい。

今回、尾崎と斎藤の演説を採り上げた意図はいくつかある。本当に凄みのあるもの、覚悟を伴ったものを知ることで、そうでないものと見分けることができる。今の政治は、果たしてどうか。

そして、見逃せないのは、同時代に生きた尾崎や浜田、そして斎藤は「**互いに切磋琢磨**」したということ。今回の罌堂塾、22期も、ここ永田町1丁目1番地、憲政記念館に通ってくださる方がいる。そして画面の向こうでも、一緒に学ぶ仲間がいる。ぜひとも、それぞれが良い刺激を与えあう、そんな8か月になってほしい。

今回は採り上げなかったが、他にも注目したい演説はいくつかある。今回は戦前昭和期を採り上げた。他にも明治ならば**田中正造の「亡国演説」**、亡国に至るを知らざれば、これすなわち亡国というもの。1900年(明治33年)、第4次伊藤内閣のときの演説。

「**民を殺すは国家を殺すなり。法を蔑(ないがしろ)にするは国家を蔑ろするなり**」と追及。また、戦後まもなくは世論を自民党と社会党が二分していた。戦後初の民選総理は社会党の片山哲(第46代)、一番の人気は**浅沼稻次郎**書記長のときが絶頂だった。浅沼は1960年(昭和35年)日比谷公会堂で命を落とすが、やはり演説を大事にしていた。本人もさることながら、所得倍増論で戦後経済をリードした**池田勇人首相の追悼演説**も機会があれば触れてほしい。

平成期では、尾辻秀久議員が行った**山本孝史・参議院議員への哀悼演説**、がん基本法の成立に尽力した方。また平成の最後を飾った**枝野幸男・衆議院議員の「内閣不信任演説」**も注目に値すると思う。最近では迷いが見られるが、与党の批判ばかりに明け暮れず、ストレートに「政治のあるべき姿」、保守もリベラルも関係ないところで、どんな国にしたいのか。そこにこだわれば良いのと思う。

【エピローグ】

・「良い政治」とは、良い政治家とは、そして良い有権者とは。それが分かればそもそも苦労はないわけで、考えるしかない。そして考えるだけでなく、政治家の立場でも、有権者の立場でも、行動に移していくしかない。

少なくとも政治そのものに関しては、衆議院の事務総長、ちょうど大島議長を補佐する立場の方で向大野新治(むこおおの・しんじ)さんという事務次官に相当する方がこうおっしゃっている。

『議会学』と題された本に、このようなことが書かれてある。

「国会で与野党が激しく対立する法案を審議するとき、よく識者やマス・メディアが言うのは、与野党が、どちらも十分と言うくらい時間をとり、自由闊達に議論し、最後は強行手段に訴えたり、議事妨害することなく、粛々と採決し、多数決で決めることがもっとも大事だということである。

しかし、筆者は、こうしたことは形式的なことで、もっとはるかに大事なものは、結論を受け入れがたい少数者や弱者、あるいはそういう人達を代表する少数党に、どれほどの配慮がなされ、彼らもどこまで甘受するかということだと思っている。国会で議論されるのは、学生の討論会の議題のようなものではない。法律は、人々の権利・義務を定めたり、何らかの便宜を与える一方で、何らかの負担を強いられたりうる。つまり、人によっては、自分の命や財産、生活がかかっていたり、自分の引けない感情にからむものだったりするのである。

そうした場合に、十分な議論をして多数決で決めたことであれば、本当に誰もが納得し、受け入れるだろうか。一般的に、人は、自分に犠牲を強いるようなものであれば、まず第一に廃案を望むだろうし、次善の策としては、修正を求めるだろう。それでだめなら、何らかの手当や償いを求めるに違いない。それも無理で、一方的に犠牲を払う側にいななければならないときに、果たして、善処をお願いしている議員が淡々と質疑を行い、採決のときにただ反対として自席に座っていることを容認できるだろうか。場合によっては、自分たちの怒りをその場で見せてほしい、体を張って阻止してほしいと思うのが人情ではないだろうか。

少数者も、自分たちの要求が認められない客観的事情は当然のごとくわかるわけで、それでも自分たちの思いをわかってくれた、それを国会の場で他の議員にわからせてくれたということでもって、その嫌な結果を受任してくれるのである。」

(『議会学』40頁)

「絶対の正解」はない。誰が正しいかではなく、何が正しいか。もしかしたら塾生の皆さん同士でも違うかもしれない。

もしかしたら、130年の歴史も、実はその繰り返しだったかもしれない。

昔が良かったわけではない、冒頭とりあげた吉田松陰の弟子、品川弥次郎が内務大臣だったころは凄まじい選挙干渉があった。広島の問題で揺れている金権政治も、今の比ではなかった。少しずつだが、政治は進化しているし、これからも進化していかなければならない。

尾崎財団の、そして峯堂塾の存在意義を考えるうえでも同じことが言える。

それを皆さん、これから一緒に学んでいきましょう。

(了)